

G-08

言語を手がかりに見出しうるもの
— 「アマモ」とセリ語の事例 —

中川 亮 (東京大学大学院総合文化研究科 / IHS 修士課程 2 年)

発表の出発点としましては、このセミナーのチラシにある「作られた物を消費する力から、既にある物を探し出す力へ」という言葉を選びました。「既にある物」を活用しようとする場合にふと同時に浮かぶものという、数が減ったり絶滅しそうだったりする動植物、あるいは危機言語の存在です。そうした生物の危機や言語の危機というのは「既にある物」にこれからどういふふうに向き合っていくのかを考えるきっかけになるのかなと思います。私の専門である言語学あるいは言語研究に引きつけてということであれば、すごいスピードで変化していく生物であったり言語であったりの多様性に、どのように言語研究が向き合っていけばいいのかということが問われているかと思えます。

少なくとも言語多様性に関して言語学がどのような姿勢をとってきたかという、地球上に存在する言語の多くは話者が少なく消滅の危機に瀕しており、しかしながらそうした各言語には同じような文化的価値があるので、その損失は人類にとって損害であり、したがって消滅する前に危機言語は記述ないし記録されていかなければならないという考え方があられるわけです。しかし、記録や記述がどのようなことをもたらすのか、そして危機言語の話者の居場所はどこにあるのかということについては、もう少々検討が必要であると思われまます。

そこで、そういった論点について考えるために、「アマモ」という海草と、アマモについて特徴的な使用をしているセリ語という言語の話者たちについて考えてみたいと思います。実際の発表の中ではアマモが穀物として使われているということ、そしてその知識の伝達によって、セリ語の役割として記録・記述の翻訳がどのような役割をもっているかということについて検討したいと思います。

言語を手がかりに見出しうるもの —「アマモ」とセリ語の事例—

東京大学大学院総合文化研究科 / 多文化共生・統合人間学(IHS) 修士課程2年 中川亮

作られた物を消費する力から、既にある物を探し出す力へ。(本セミナーフライヤー)

入新世においては「既にある物」を活用することが求められているが、その一方で、多くの文化や生物がひっそりと失われつつある。「既にある」リソースを活用しようとするならば、失われつつあるものをひとつでも多くすくいあげていかねばならないだろう。だが、私たちがどのようにそうした文化や生物に関心を持ち、知り、活用することができるだろうか。

1. セリ語から「アマモ」を学ぶ

□セリ語(Seri)

- ・メキシコのソノラ州において、狩猟・採集・漁労生活を伝統的に営んできた数百人程度の話者により話される少数言語
- ・Moser夫婦による言語調査

セリ語が使用されるエリア



□アマモ

- ・狭義にはアマモ科アマモ属の海草(*Zostera marina*)。
- ・日本では3科8属16種に及ぶ海草をアマモ類と呼んでおり、うち13種が準絶滅危惧種または絶滅危惧種に指定。
※*Zostera marina*は絶滅危惧種でない



アマモ
(三重県農水商工部水産養殖室(2008)による)

□セリ族(*comcaac*)にとってのアマモ

- ・Moserらは調査の過程で、アマモ(eelgrass)の種子が *xnoois* (フノーイス) と呼ばれており、セリ族の重要な食糧源であることを知る。
- ・種子が食用になる。4~5月に収穫し、たとえばオートミールのようにして食べる。
- ・同じくセリ族にとって重要な資源であるウミガメの餌にもなる。
- ・Felger & Moser (1973) と Sheridan & Felger (1977) の報告によれば、*xnoois* は海から採取される唯一の穀物。

2. 言語を通じて知識にアクセスする

□伝統的知識へのキーとしての言語

- ・ *xnoois* という単語がセリ語話者の知識を引き出すトリガーになる。
- ・セリ語が調査されなければ、Moserらが収集したような知識を得るのは困難。
- ・17~18世紀の宣教師たちは、カリフォルニア湾の住民が海草の種子を食用を知っていたが、Moserらの報告ほど詳細な知識であったかは疑わしい。

□記録・記述の媒体としての言語

- ・遠隔地から共同体の知識へアクセス可能に。
- ・翻訳による知識の伝播の可能性
- ・翻訳と知識の相対化
→各地における「アマモ」の呼び方が手がかりに、様々なアマモの使いみちへアクセスする。
e.g. *Zostère* → マットレスの詰め物
Eelgrass → 乾かして防火材に使用
アマモ → 水生生物の住処、水質の安定

3. 知識を活用する・取り入れる

□共同体の知識を応用

- ・「アマモ」を食用にする、防火材にする 等
→ 生活文化のハイブリディティ

□少数言語話者を包摂した「知」の生成と活用

- ・共同体の知識を人類の知識へ。
- ・記録や翻訳を通じてセリ語の足跡を残す。

□生物多様性への関心を喚起する

- ・絶滅の危機にあるアマモ類の存在と有用性が「アマモ」という語を媒介に伝達される可能性。

結論

セリ語話者たちが持つ「アマモ」についての知識は、セリ語が調査されたことで私たちにもアクセス可能なものとなった。その知は記録・記述・翻訳を通じて伝達され、生活文化の多様性やマイノリティを巻き込んだ知の生産過程へとつながっていくだろう。言語は、「既にある物」へのアクセスを可能にし、私たちの生活にヒトを与えるかもしれないのである。そうしたことを見出し記録に残しておくことこそ、入新世における言語学・語彙論・辞書学の使命の一つではないだろうか。

主要参考文献

エヴァンズ, N. (2013) 『危機言語 — 言語の消滅とわれわれは何を失うのか』 (大西正幸・泉田俊樹・森若葉訳), 京都: 京都大学学術出版会。/ Felger, R. S. & Moser, M. B. (1973). Eelgrass (*Zostera marina* L.) in the Gulf of California: Discovery of its nutritional value by the Seri Indians. *Science*, 181, 395-396. / Felger, R. S., Moser, E. & Moser, M. B. (1980). Seagrasses in Seri Indian Culture. In R. C. Phillips & C. P. McRoy (Eds.), *Handbook of Seagrass Biology: An Ecosystem Perspective* (pp. 260-276). New York: Garland STPM Press. / 三重県農水商工部水産養殖室(2008) 『アマモ増再生ガイドブック』 / Sheridan, T. E. & Felger, R. S. (1977). Indian Utilization of Eelgrass (*Zostera marina* L.) in Northwestern Mexico: The Spanish Colonial Record. *Kiva*, 43(2), 89-92.